

(様式 1)

令和 5・6・7 年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(3 年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	綾部市立吉美小学校							校長名	伊豆 紀代美
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	1 2 3 名
学級数	1	1	1	1	1	1	3		
事業担当教員名	細辻 浩介								
① 中学校区で目指す子ども像	ブロック教育目標 自立と貢献 ～夢をもち 仲間とともに 未来を切り拓く 子どもの育成～ ブロック 目指す子ども像 ・夢をもち (将来を見据え、主体的に学び表現する子) 【展望する力】 ・仲間とともに (豊かな心をもち、自他ともに大切にできる子) 【つながる力】 ・未来を切り拓く (心身ともに健康で、実践力と行動力のある子) 【挑戦する力】 ・綾中ブロックの子 (誇りと郷土愛をもち、地域とかかわる子) 【貢献する力】 1 主体的に学び、課題解決に向けて最適な方法を選び、粘り強く取り組むことができる。 2 他者と効果的にコミュニケーションを取り、対話を通じて自分の考えを伝え合う表現力(話す・聴く・考える)を身に付けている。 3 自己理解を深め、夢や希望をもち、それらの実現に向けて行動することができる。								
② 目指す子ども像	綾部中学校ブロック 1 主体的に学び、課題解決に向けて最適な方法を選び、粘り強く取り組むことができる。 2 他者と効果的にコミュニケーションを取り、対話を通じて自分の考えを伝え合う表現力(話す・聴く・考える)を身に付けている。 3 自己理解を深め、夢や希望をもち、それらの実現に向けて行動することができる。 吉美小学校 ・学習等の過程に能動的に関わり、自己の認知活動や行動をコントロールしながら目標達成に向かおうとしている。【自己調整】 ・やるべきことの見通しをもち、それに従って物事を進めようとする態度が身に付いている。【計画性】 ・学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする姿勢が身に付いている。【学びに対する積極性】 ※【 】… 令和 6 年度 京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～の結果において、回答値が低かった項目								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・1 時間の授業や単元全体の中で、児童が学び方を選択できるといった「個別最適な学び」の環境を十分に整えられていない。 ・自己理解が十分でなく、最適な学び方を選択することが難しい児童がいる。 ・話を集中して聞くことが難しく、内容が分かっていない児童がいる。 ・グループで話し合ったり教え合ったりする活動には意欲的に取り組むが、一人で考えたり、問題解決を図ったりすることに課題がある。 ・教師が与えた学習課題に対しては、あきらめずに取り組んだり、最後までやり切ったりすることはできるが、家庭における自主学習に進んで取り組む児童は少ないと思われる。								

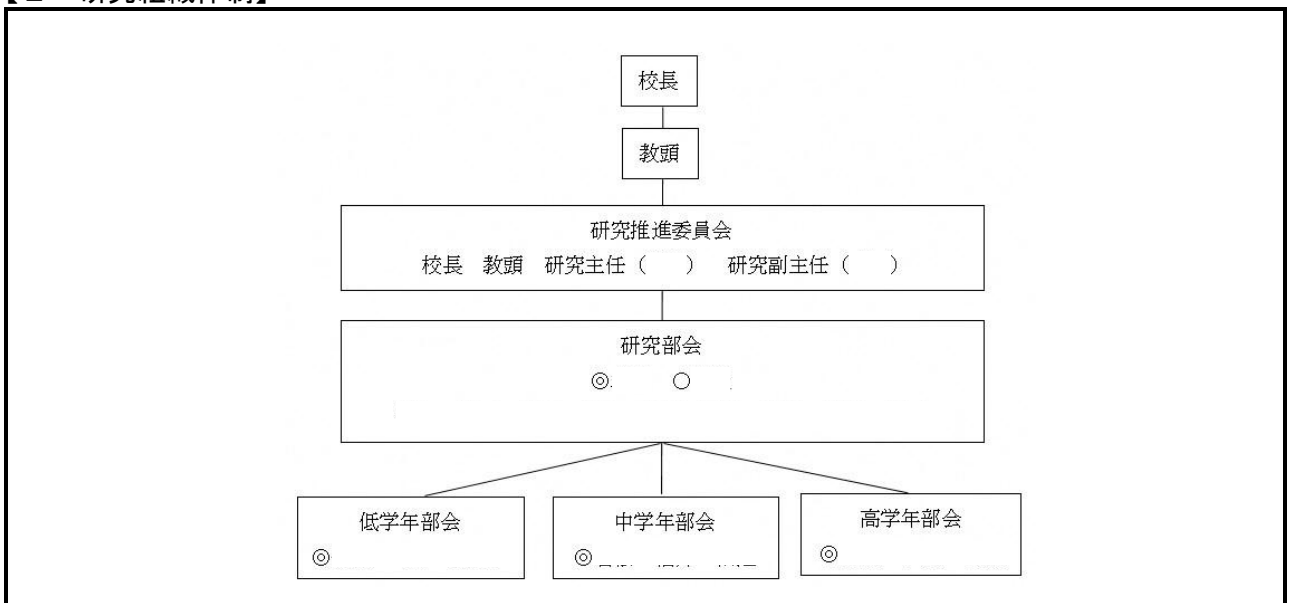
④ 目指す子ども像に達するための仮説	・授業の終末にまとめる「振り返り」に対する指導を充実させることによって、児童の自己理解が深まったり、自己調整への意欲が高まったりするのではないかな。 ・「もっと知りたい」、「もっと考えたい」と思えるような学習課題、発問等を工夫することによって、児童の好奇心をかき立て、主体性を発揮させることができるのではないかな。 ・タブレット端末（クラウド環境）を用いた他者参照をさせたり、学びの選択肢を与えたりすることによって、自らの学びを調整しようとする態度が育つのではないかな。 ・授業や単元の中で、児童に「身に付けさせたい力が身に付いたか」という視点で検証することによって、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を確実に身に付けさせることにつながるのではないかな。 ・家庭学習（自主学習）について、授業の中で適切な指導や評価を積み重ねたり、家庭への啓発を行ったりすることによって、自律的に学ぶ児童が育つのではないかな。 ・チャレンジ精神や粘り強さ等の非認知能力に刺激を与えることを意識した「働きかけ」や「授業づくり」を行うことによって、認知能力と非認知能力を一体的に育むことができるのではないかな。
--------------------	--

令和7年9月29日現在

【1 研究主題】

認知能力と非認知能力を一体的に伸ばす教育の創造
～ 非認知能力に刺激を与える「働きかけ」・「授業づくり」を通して ～

【2 研究組織体制】



【3 具体的な取組内容】

- ・非認知能力の育成に関わって、児童への価値の「押し付け」ではなく、適切な「働きかけ（意識づけ）」によって、目指す児童像の実現を図る。
- ・日々の授業では、認知能力を獲得するために必要な非認知能力を考えながら、双方の力を相補的かつ一体的に育成していく。※ 研究授業や実践交流会の実施
- ・学習の振り返りでは、「自己認識（自己客観視・自己調整）」を育成するプロセスを明確にし、指導・支援を充実させる。
- ・タブレット端末（クラウド環境）を効果的に活用しながら学習方法を選択させる等、児童が自己調整のスキルを磨く機会を設けるとともに、適切な指導・支援を行う。
- ・家庭学習の手引きを改訂し、自律的に学ぶことに対する価値や学ぶ意義等について、児童や家庭に啓発していく。
- ・「全国学力・学習状況調査」や「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」、「標研式CDT（学力検査）」等の結果分析を通して、児童に身に付けさせたい力が身に付いているかを検証し、課題に対する具体的な方策を立てる。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4～6	30	自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。	自己調整	
4～6	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。	自己調整	
4～6	32	課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。	自己調整	
4～6	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	自己調整	

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

6年

【学力に課題のある児童】

・通し番号A

「好奇心」の回答値が低く、前年度よりも2ポイント低下している。また、個人カルテを見ると、「自分らしさの発揮」の回答値も低く、前年度よりも1.75ポイント低下している。「表層理解」については、回答値が高い。しかし、授業の様子からは、正答に至るまでの過程を大切にしながら問題を解くことができるようになってきている。今後は、授業の導入や教材の工夫を行い、分かる喜びや深く理解することの大切さを感じさせながら、学力の向上を図っていく。

・通し番号B

非認知能力に関する調査における回答値が全体的に高い。しかし、学力値は高くなく、算数科に関しては、学力の伸びが低下している状況である。課題に粘り強く取り組んだり、友達と対話しながら問題解決している様子は伺えるが、学習内容が分かっていたり、深く考えることができていなかったりする。今後は、授業中の活動が学習内容の理解につながっているかという点に留意して様子を見ていくとともに、考えの根拠を明確にさせることによって、論理的思考力を身に付けさせていく。

【質問調査の回答値が低く、学力の伸びに課題のある児童】

・通し番号C

非認知能力に関する調査における回答値が全体的に低く、前年度よりも下がっている。特に、「自己調整」の項目が顕著である。学習方法に関する調査においても、「体制化」や「精緻化」の値が低く、学んだ内容を関連させたり、まとめたりすることが出来ていないと認識している。普段の様子にからも、授業中に話を聞いていなかったり、聞いていても内容が理解できていなかったりする場面も見られ、学びに対して受動的である。また、自分の思いをまとめることも苦手である。今後は、思いや考えを聞き出した、書く視点を与えたりするといった個別の支援を通して、自分の考えを表現する力を育成しながら、自己理解を深めさせる。また、学習内容が理解できていない場合についても、個別の支援を行う。

5年

【学力に課題のある児童】

・通し番号D

回答値は、全体的にマイナスの傾向にあるが、「学びに対する積極性」や「計画性」、「自己調整」等の項目は高い値を示している。しかし、一斉指導では内容の理解が十分でないことがあるため、今後も、授業における理解の状況を確認するとともに、必要に応じて個別に指導・支援を行う。また、個人カルテから、「自分らしさの発揮」の回答値が低いため、頑張りを認めることを大切にし、学習への意欲が低下しないようにしていく。

【学力の伸びに課題のある児童】

・通し番号E

前年度より算数科の学力値が下がっており（－3）、回答値についても、全体的に低下傾向にある。特に「チャレンジ精神」の回答値が低い状況にある。（前年度からのマイナスも大きい。）授業では、正答することだけに意識が向いていることもあるが、難しい問題を進んで解こうとする姿も見られる。今後も、授業において理解の状況を確認するとともに、自分の意志で難しいことにも挑戦できるよう声をかけていく。

【学力を大きく伸ばしたが、質問調査の回答値が低かった児童】

・通し番号F

算数科の学力値は大きく伸ばしているが、全体的に回答値は低く、前年度からのマイナスも大きい。しかし、「好奇心」や「思考の柔軟性」、「心理的安全性」の回答値は高いため、これらの要素が学力を伸ばした要因だと考えられる。今後も、安心して学べる環境づくり（学級経営）を心がけるとともに、授業の中で非認知能力に刺激を与えたり、対話的な学びの一層の充実を図ったりしながら、学力を向上させていく。

4年

【学力に課題のある児童】

・通し番号G

「自己調整」や「計画性」の回答値が低く、「表層理解」の回答値が高い。授業では、内容（解き方）が理解できていなくても、一人で解決を図ろうとする傾向がある。今後は、自分の学び方を振り返らせながら改善を促すとともに、対話的な学びの実現を通して、深く理解することの良さを感じさせていく。

・通し番号H

全体的に回答値が高い傾向にある。特に「自己調整」や「学びに対する積極性」の項目で高い回答値を示しているが、学力の課題は大きい。授業中の課題だけでなく、家庭学習（宿題）も頑張っており、今後は、授業を通して学力の定着を図るとともに、本児の課題に応じたプリントを準備するなど、学力や理解の状況に応じて自らの学びを調整できる環境を整えていく。

【学力値が高く、質問調査の回答値に特徴が見られた児童】

・通し番号I

「学びに対する積極性」と「他者と進んで関わろうとする態度」の回答値が低い。学力が高いため、算数科の授業では自力で素早く正答を出しており、「問題をもっと解きたい」という思いが強い。今後は、発展問題に取り組ませる機会を設けるなど、個別最適な学びの充実を図るとともに、友達と考えを交流する中で学びを深めさせることによって、満足感を持たせていく。

集団としての具体的な指導・支援方法

6年

- ・新しい単元の学習に入る際には、単元のゴールを意識させるとともに、自分で課題を見出したり、その課題の解決に向けて学習を進めたりする経験を積み重ねさせる。（※目標や身に付けさせたい力から逸脱しないように留意する。）
- ・課題解決の方法を考えることが大切であることは分かっているが、答えを出すことができればよいと感じている児童も多いため、集団解決（考えの共有）の場面では、よりよい方法について自分の考えを持たせるようにする。
- ・学びに対する積極性や計画性を高めるために、家庭学習の取り組み方や単元末に実施する評価テストの結果を振り返り、自分に必要な力（学習）について考えさせる。また、家庭での自主学習に取り組む習慣が身に付くように働きかけを行う。

5年

- ・自己調整をしながら学ぶ授業スタイルの確立を図りながらも、知識の概念的な理解を深めさせたり、反復練習を繰り返しながら、正しく計算する技能を身に付けさせたりする。
- ・授業や単元の終末で行う「振り返り」では、「問題解決をどのように行ったか」や「間違えた原因はどのようなことにあったか」等、学習内容と自身の学びの様子を関連させながら記述させ、今後の学びに生かせるようにする。
- ・考えの共有を充実させることによって、多様な考え方に触れさせるとともに、「なぜ、そうなるか」と考えさせることを大切に、深い理解や思考力の向上につなげる。
- ・どの学力層の児童においても、「分かるようになりたい」という思いを持ち、自分から進んで質問したり、難しい問題にも前向きに取り組んだりする姿が見られるため、これらの積極的に学習に向かう態度について、適切な評価を行う。

4年

- ・自律的に学習する態度を身に付けさせるために、授業では、学び方についての指導（例示）を行ったり、自分に適した学び方ができる環境を整えたりする。
- ・学力に課題のある児童でも「解き方（その理由）」を理解したいと思い、粘り強く学習に向かうことが一定できるため、授業の中で考え直す場面を設け、学習内容の理解の定着を図る。
- ・授業や単元の終末で行う「振り返り」では、学んだことや分からなかったこと等にとどまらず、学習内容と自身の学び方を関連させた記述を促す。（振り返りの共有を積極的に行う。）
- ・児童の好奇心をかき立てるような導入（授業展開）を心がけるとともに、家庭学習で「調べたい」や「やってみよう」という意欲を喚起する言葉かけを行う。
- ・宿題の量を見直したり、自主学習の取り組み方を具体的に指導したりすることによって、家庭学習の時間の確保に努める。

【8 仮説の修正】（確認）

- ・授業の終末にまとめる「振り返り」に対する指導を充実させることによって、児童の自己理解が深まったり、自己調整への意欲が高まったりするのではないかな。
→「振り返り」の活用を通して、その意義を感じさせ、自己調整を図ろうとする態度の育成につなげる。
- ・「もっと知りたい」、「もっと考えたい」と思えるような学習課題、発問等を工夫することによって、児童の好奇心をかき立て、主体性を発揮させることができるのではないかな。
→研究授業の事前研究会で協議している「教師の仕掛け」を日々の授業づくりの中で実践していく。
（※「教材」「活動」「(教師の) 問い」等の工夫によって、好奇心をかき立てる。）
- ・タブレット端末（クラウド環境）を用いた他者参照をさせたり、学びの選択肢を与えたりすることによって、自らの学びを調整しようとする態度が育つのではないかな。
→学習形態の工夫が学力の向上（学習内容の理解）につながっているかという視点で見直しを図る。
- ・授業や単元の中で、児童に「身に付けさせたい力が身に付いたか」という視点で検証することによって、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を確実に身に付けさせることにつながるのではないかな。
→授業を通して、(児童が)「問題が解ける」ということにこだわる。
- ・家庭学習（自主学習）について、授業の中で適切な指導や評価を積み重ねたり、家庭への啓発を行ったりすることによって、自律的に学ぶ児童が育つのではないかな。
→家庭学習の手引きの改訂を含め、十分な働きかけができていない。自主学習「ノート」だけでなく「デジタルノート」の活用も図っていく。
- ・チャレンジ精神や粘り強さ等の非認知能力に刺激を与えることを意識した「働きかけ」や「授業づくり」を行うことによって、認知能力と非認知能力を一体的に育むことができるのではないかな。
→算数科以外の教科においても、1時間の授業や単元の中で、「計画性（①目標を決める②活動内容や順序を考える③粘り強く取り組む）」に関する負荷をかけ、チャレンジさせる。

【9 具体的な取組内容の修正】

--

【10 児童の変容（普段の様子から）】

学習内容が難しくなっても、個別の支援を行うことによって、意欲を持続させることができた。書く活動においては、個別の支援を通して、自分の思いや考えが書けるようになったり、学習の振り返りの場面では「私はよく分かっていないので、～」といった自己理解に基づく記述をしたりする様子も見られるようになってきた。学び方については、タブレット端末を用いた他者参照や、課題の量及び質の工夫等、学びの環境を整え、見直すことによって、少しずつではあるが、自己調整をしながら学ぶ経験を重ねることができた。

【11 次年度の研究構想】

京都府教育委員会『学校改善支援プラン 調査結果分析』（令和6年3月）では、学力値と相関が見られる非認知能力として、「学びに対する積極性」と「精緻化」の2項目が挙げられている。次年度の分析では、それらの項目に焦点を当て、研究推進におけるR V－P D C Aサイクルの確立を目指したい。